

## 重症心身障害児（者）へのパソコン指導

～自己表現・余暇の充実～

下茶谷晃<sup>1)\*</sup>

1) 国立病院機構鳥取医療センター療育指導室

### Instruction in the use of personal computers of children (persons) with motor and intellectual disabilities

– To promote self-expression and fulfillment in their spare time –

Akira Shimochaya<sup>1)\*</sup>

1) Care and Education Support Section, NHO Tottori Medical Center

\*Correspondence:shimocha@tottori-iryu.hosp.go.jp

#### 要旨

重度の障害のある患者がパソコン機器を使用する為には、本人に適した入力方法が必要になることがある。今回の症例の対象者は、呼気スイッチで文字入力をしている。そこで、文字入力が円滑に出来るように、各行ごとに記号をつけ、分からない文字でもその行・文字を確定できるか検討した。まず、図形、色での手がかりで文字入力を試みたが判別が出来なかった。そして、絵を手がかりにしたところ、誤入力はあるものの入力可能となっていく。今後も、このような取り組みを継続していくことで、患者の余暇充実を図っていききたい。鳥取臨床科学 2(2), 185-195, 2009

#### Abstract

If persons with severe disabilities use personal computers, it is necessary to set up a suitable input method. A male patient in his 60s, presented here, uses an input system operated by the patient's expiratory flow. In this case, he needed to learn how to select the words he wanted to input, even with impaired ability to understand written words. We considered the easiest method for selecting the words to input by indicating with figures, colors or pictures, and found that figures were best for him. In the beginning, he selected the wrong words and needed assistance by staff members, even by pictures; however, he has gradually improved his skills to input the desired words. This type of effort should be continued to give patients the ability of self-expression and fulfillment in their spare time. *Tottori J. Clin. Res.* 2(2), 185-195, 2009

Key Words: パソコン, 文字入力, 絵, 重症心身障害児（者）; personal computers, input words, input with assistance of pictures, children and persons with motor and intellectual disabilities

#### はじめに

近年、パソコン機器というのは私達が生活して行く上で、欠かせないものになって来ている。

. A 病院の重症心身障害児（者）病棟でも、他者とのコミュニケーションや余暇活動の手段の1つとして活用している患者がいる。

重度の障害のある患者がパソコン機器を使用する為には、本人に適した入力方法が必要である。そこで、本人の自己表現や余暇の充実を目的に、スムーズな文字入力の指導を行った事例を報告する。

## 目的

パソコン利用患者の自己表現・余暇の充実を図る為、他者とのやりとり（手紙）と入力時の文字選択の習得を行う。また、セッティング及びトラブル時の対応マニュアルの作成とスイッチの検討を行う。

## 症例（対象者）

年齢: 60 歳代。

性別: 男性。

大島分類<sup>1)</sup>: 4。

意思表示: 発語はあるが不明瞭。日常的な事についての要求を他者に伝えることは可能である。

絵画語彙発達検査<sup>2)</sup>(2006年12月4日に実施): 語彙年齢は7歳6ヶ月。

## 方法

指導: 担当児童指導員が、週2回、ベッドサイドにて実施する。

スイッチ操作方法: 呼気スイッチ。

使用ソフト: 「伝の心」<sup>3)</sup>(2007年3月27日に購入)。

パソコン購入以前: トーキングエイド<sup>4)</sup>を使用。

手紙の内容は、担当児童指導員と話をして決める。文字入力は模写の為、文字カードを提示しながら入力する。

倫理的配慮: 論文として報告、掲載することに関し、写真の掲載も含め、患者本人及び成年後見人に説明し、同意を得ている。

## 2007年度の実施状況

指導回数は50回で、手紙を10通、年賀状を22通作成した。

パソコン指導開始当初、呼気スイッチのタイミングが合わないことが多かったが、次第に合うようになって来た。しかし、入力が早かったり遅かったりすることはあった。まだ画面上の文字盤と提示した文字カードの位置や文字を覚え切れていない為、誤入力することが多かった。

提示文字が入力可能な文字は「あ、く、し、す、つ、て、と、な、ね、の、は、ひ、ま、ゆ、ん」で、正誤がある文字は「い、か、こ、に、へ、も」であり、その他の文字は入力不可であった（指さしが必要）。



図1 入力状況（呼気スイッチ）

本人の健康状態から、呼気スイッチ<sup>5)</sup>(図1)では入力困難な時があった為、呼気スイッチ以外のスイッチを検討した。手操作スイッチでは緊張が強く、不随意運動があるために使用困難であった。舌スイッチでは、市販のものを右頬骨のあたりに置き、入力するときに、上に頬を押し当てるようにするとスムーズに操作ができた。しかし、スイッチを押すタイミングがずれたり、スイッチを押したままになったりすることがあった。

## 2008年度の実施状況

指導回数は42回で、手紙を14通、年賀状を25通作成した。

手紙を入力していく中で、間違えることや、「指さし」で指示が必要なことが多い為、各行ごとに記号をつけて、識別できない文字でも行・文字を確定できるかを検討した。

始めに、図形を手がかりに文字を選択して